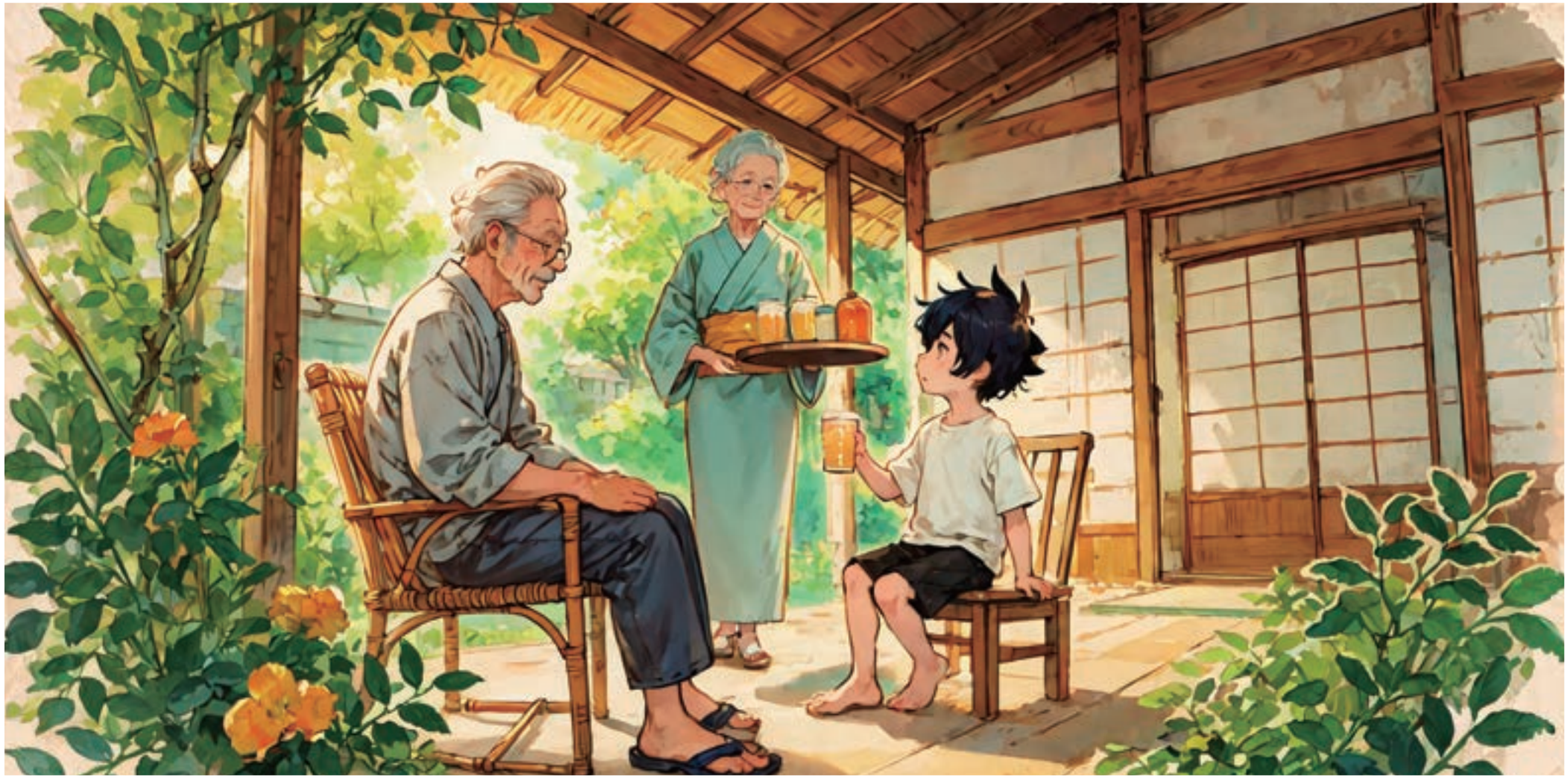
つぶ太とおじいちゃんの
不思議な冒険

- 夜空の図書館 -

美しい森と清らかな小川が流れる小さな村の外れに、一軒の家が静かに佇んでいます。穏やかな自然の風景が広がる中、その家には老夫婦が暮らしていました。



ある夏の日、孫のつぶ太は祖父母の家を訪れていました。粒太はおじいちゃんとおばあちゃんが大好きで、特におじいちゃんが語る不思議な物語に夢中になっていました。

ある夜、つぶ太はおじいちゃんと一緒に庭で星空を見上げていました。涼しい風が頬を優しく撫で、静かな夜の音が二人を包み込んでいました。

「つぶ太、お月様を見てごらん」とおじいちゃんが優しく言いました。

つぶ太はお月様を見上げると、おじいちゃんが静かに話し始めました。

「あそこには、『夜空の図書館』という不思議な場所があるんだ。そこでは、星の精たちが集まって本を作るんだ。その本にはたくさんの不思議な物語が詰まっているんだよ」

つぶ太は、おじいちゃんの話に夢中になりました。

「おじいちゃん、その図書館に行ってみたい！」

おじいちゃんはにっこりと笑って答えました。

「これは秘密なんだが、特別な月の夜にだけ開かれる秘密の扉を通って、その図書館に行けるんだ。今夜は、その特別な夜なんだよ」とおじいちゃんが続けました。

つぶ太はワクワクしながら、秘密の扉がどこにあるのかを尋ねました。

おじいちゃんは静かに立ち上がり、つぶ太を納屋へと連れて行きました。納屋の奥にある古びた扉を指さしながら、おじいちゃんは言いました。

「この扉を開けると、星々が輝く夜空の図書館が広がっているんだ」

つぶ太はドキドキしながら扉を開けました。

すると、そこにはたくさんの星がキラキラと輝く美しい図書館が広がっていました。
図書館の中には、たくさんの本棚が並び、その一つ一つにきらきらと光る本が置かれていました。つぶ太は目を輝かせながら本棚を見渡しました。
すると、図書館の奥からウサギのような耳を持つ人が二人の方へ歩いてきました。

「ようこそ、夜空の図書館へ。私は、ここで司書をしているもち子といいます。」

もち子はにっこりと笑いながら言いました。

「ここには、不思議な物語がたくさんあります。今日はどんな物語をお探しですか？」

つぶ太はおじいちゃんの昔話を思い出しながら答えました。

「おじいちゃんが若いときにした冒険の物語を読みたいです！」

もち子は満足げに微笑み、本棚の一冊を取り出しました。

「それでは、こちらの本をどうぞ。おじいちゃんが若い頃に経験した素晴らしい冒険の物語です。」

つぶ太とおじいちゃんがその本を開くと、二人は本の中の世界に引き込まれていきました。

二人は、緑豊かな川のほとりに立っていました。川の水は濁り、流れが弱くなっています。つぶ太はあたりを見回し、不思議そうに尋ねました。

「おじいちゃん、ここはどこ？」

「ここは、私が若いころに来たことのある川だよ。」おじいちゃんが答えました。

つぶ太が川の様子を見ていると、突然、川の方からカッパが現れ、二人に向かって近づいてきました。

つぶ太はカッパを見るのが初めてなので、とても驚きました。

おじいちゃんは、おやつとして持ってきていたきゅうりをカッパにあげると、カッパはきゅうりをその場で食べ始めました。

カッパはおじいちゃんとつぶ太に近づき、柔らかい声で話しかけました。

「ちょうどお腹が空いていたところだったんだ。新鮮でみずみずしい、いいきゅうりだ。私はミツハ。この川の水が汚れ、水が少なくなってしまったので調査していたところだ。」

「どうだ？　一緒に来るか？」

ミツハが言うと、つぶ太はうなずきました。

おじいちゃんとつぶ太はミツハと一緒に川の問題を調査することにしました。

川のほとりを歩いていると、突然、魚の精霊が水面に現れました。

ミツハは精霊たちととても仲良しです。

「ミツハ、ミツハ。私はこの川に住む魚の精霊です。最近、水が汚れてしまって、とても困っているのです。」

つぶ太は魚の精霊に尋ねました。「どうして水が汚れてしまったの？」

魚の精霊は悲しそうに答えました。「人間たちが川にゴミを捨てるせいで、水が汚れてしまったのです。水がきれいでないと、私たち魚は生きていけません。」
おじいちゃんがうなずきながらつぶ太に言いました。「水はみんなにとってとても大切なものなんだ。」

「わかった。原因を調べて解決するよ。」ミツハがそう言うと魚の精霊は川に戻っていきました。

そして、三人が川の上流に向かって歩いていると、空から鳥の精霊が降りてきました。

「ミツハ、ミツハ。私も困っています。水が汚れてしまうと、私たち鳥も飲み水がなくなってしまうのです。」

「わかった。原因を調べて解決するよ。」

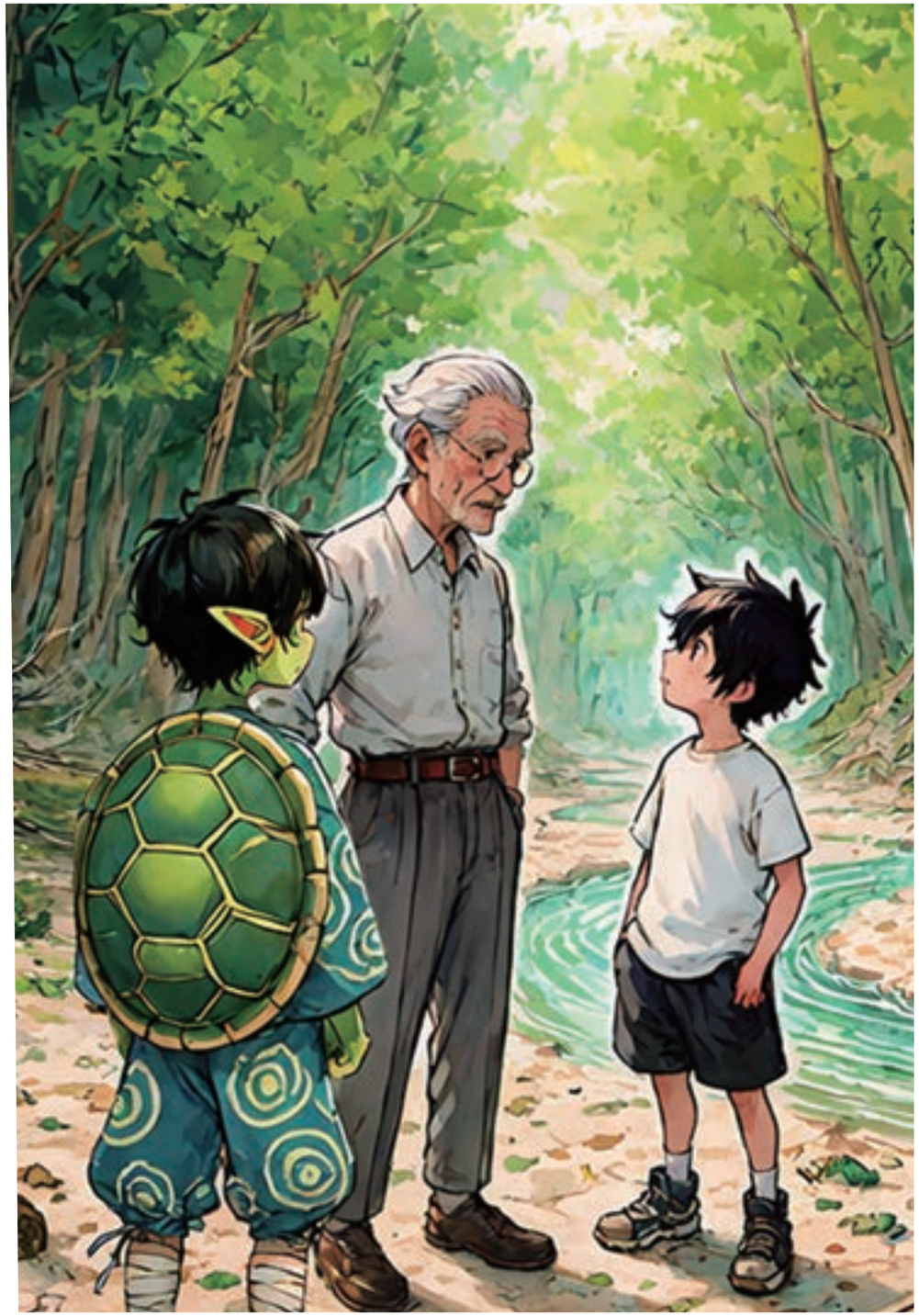
ミツハがそう言うと鳥の精霊は大空に戻っていきました。

さらに、三人が川の上流に向かって歩いていると、川のふちの木々から木の精霊たちが現れました。

「ミツハ、ミツハ。私たちにも水が必要です。水が少なくなって困っているのです。水がないと木々も枯れてしまい、この森がダメになってしまいます。」

「わかった。原因を調べて解決するよ。」

ミツハがそう言うと木の精霊たちは森に戻っていきました。



つぶ太は驚いて言いました。
「水がこんなに大切だなんて知らなかったよ。どうしたら水を守れるの？」

ミツハは答えました。
「まずはゴミを捨てないことだ。そして、水を汚さないように、みんなで協力することが大切なんだ。」

おじいちゃんが言いました。
「水は人間だけのものではない。この星に生きているみんなのものなんだ。」

風の精霊がどこからともなく現れ、ささやくように言いました。

「みんなで力を合わせて、水を守りましょう。」

つぶ太は精霊たちの話を聞いて、水を守る大切さを学びました。

そして、ミツハと一緒に川の問題を解決するためにさらに川の上流へ向かいました。

さらに進むと、川がゴミでせき止められている場所にたどり着きました。

カワウソたちが、怒りに満ちた表情で川の中にたくさんのゴミを積み上げています。

つぶ太はカワウソに話しかけました。
「こんにちは、カワウソさん。どうしてそんなに怒っているの？」

カワウソは鋭い目をして答えました。
「人間たちが川にゴミを捨てるせいで、水が汚れてしまったんだ。私たちの住む場所がどんどん悪くなっている。だから、ゴミを使って川をせき止めて、人間たちに怒りを伝えようとしているんだ。」

つぶ太は悲しそうに言いました。
「ごめんね、カワウソさん。僕たちは知らなかったんだ。」

ミツハもうなずきながら言いました。
「たしかに、ゴミを捨てることがどれだけ環境に悪いかを知らない人も多い。でも、こうやって川をせき止めることはもっと悪い結果になるかもしれない。」

カワウソはため息をついて言いました。「そうかもしれない。でも、どうしたら人間たちに自分たちの苦しみを伝えられるのかわからないんだ。」

おじいちゃんは優しく微笑んで言いました。

「カワウソさん、人間たちに森や水の大切さを教えよう。」

つぶ太も元気よく言いました。

「そうだよ、みんなで川をきれいにする方法を考えよう！」

森の生き物や精霊たちも集まってきました。そして、みんなでゴミを片付ける方法を考えました。

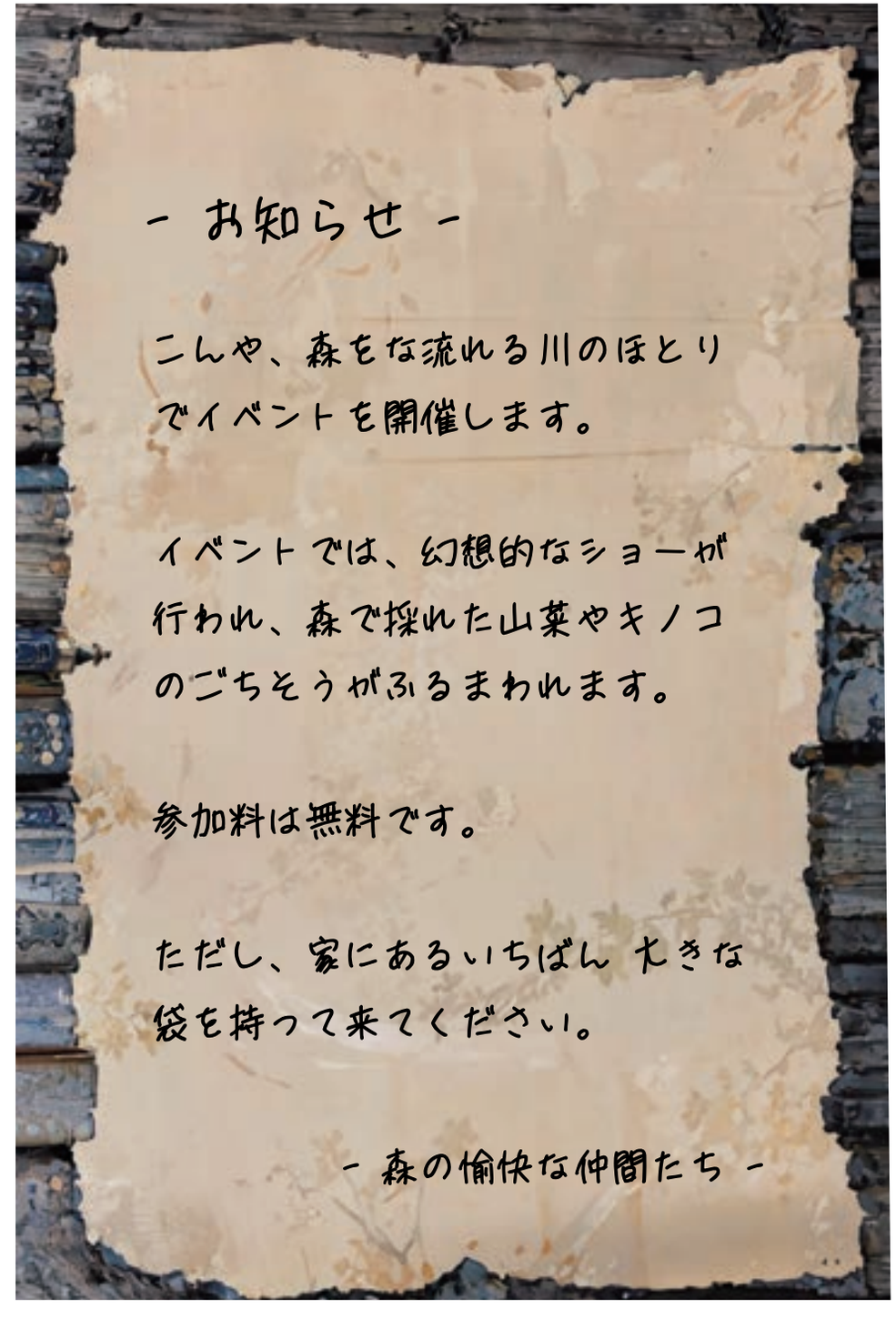
「いい考えがある。」とつぶ太が言いました。人間たちにゴミそうじをさせるというのです。

「このゴミのことを人間に知ってもらわないといけないと思う。」つぶ太が言いました。

みんなでつぶ太の話を聞きました。つぶ太の考えを気に入った森の生き物や精霊たちは、さっそく準備にかかりました。

そして、たくさんのチラシを作り、町の住民に森でイベントが行われることを知らせました。

「きっと、うまくいく」つぶ太は心の中で願いました。



その日の夕方、たくさんの町の人々が大きな袋を持って集まってきました。イベント会場に到着した町の人々は、ゴミの山を見て驚きました。

「これはいったい何だ？」と誰もが声を上げました。

その時、精霊たちの声がどこからともなく聞こえました。

「これは、人間が捨てたゴミです。森や川の水が汚れて、たくさんの生き物が困っています。」

自分たちの愚かさに気がついた人間たちは、持ってきていた袋にゴミを入れ始めました。ゴミ掃除が始まったのです。カワウソたちも手伝いました。
つぶ太とおじいちゃんも一生懸命ゴミ拾いをしました。

あっという間にゴミは片付き、森がきれいになると、川の水は元の流れを取り戻しました。

森の生き物も精霊も人間たちも喜びました。

もちろん、つぶ太とおじいちゃんも。

もうすっかりあたりが暗くなっていました。

すると突然、空が明るくなり、森の精霊たちが光を放って空を舞い始めました。

鳥たちも優雅に空を飛び回っています。森の中でも光るキノコやコケが輝き、その光に誘われるように魚たちが跳ねてダンスを始めました。それはなんともいえない幻想的な世界でした。　「こんなすばらしいものはみたことがない！」「まるでゆめの中にいるみたい！」　みんな、驚き、夜空のショーを楽しんでいます。

そして、森で採れた山菜やキノコの料理も振る舞われました。

「こんなおいしいなんて知らなかった！」「森のごちそうね！」

みんな、おいしい料理に とても喜びました。

やがて幻想的な精霊たちのショーが終わると、人間たちは大きな拍手を送りました。

そして、ゴミいっぱいの袋を持って町へと帰っていきました。

星の光やキノコ、コケが帰り道を照らしています。

森の生き物たちは、とても喜びました。

「作戦成功だな。」ミツハはつぶ太に微笑みました。

優しい風があたりを包むと、つぶ太とおじいちゃんは再び夜空の図書館に戻っていました。

つぶ太はもち子に冒険の報告をしました。

「とても大切なことを学んだようですね。」もち子はつぶ太を見て満足げにうなずき、

二人を温かく迎えました。

扉を通って家に戻ると、おばあちゃんがにこやかに待っていました。テーブルの上にはきゅうりの漬け物と冷たい麦茶が並んでいました。

つぶ太とおじいちゃんの
不思議な冒険

- 夜空の図書館 -

作 ：葉月
絵 ：Stable Diffusion / Dall-E 3

「あのあとどうなったの？」つぶ太はおじいちゃんに尋ねました。

「あの人々の町は、あれから『水の町』と呼ばれるようになったんだ。みんなが森や川を大切にしたからだな。」

つぶ太は出来事をおばあちゃんに話しながら、３人は楽しい夜を過ごしました。

水が当たり前のように周りにあるから、その大切さに気づいていないのです。

水はこの世界で、とても大切なものです。

水がないとキュウリも育たないし、麦茶も飲めません。人も動物も植物も、水がなければ生きていけないのです。

では、森や水を守るためにはどうすればいい？

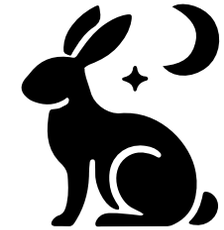
考えることが大切です。

さあ、考えてみましょう。

きっと何かできることがあるはずです。

つぶ太とおじいちゃんの不思議な冒険

夜空の図書館



著者　　：葉月
絵　　：Stable Diffusion / Dall-E 3
出版元　：PASIKURU

初版発行 2024 年 8 月 13 日